

資料館だより ●平成四年十二月十二日、おだやかな冬の晴れの好天に恵まれて、佐佐木信綱先生を記念する二つの大きい行事が催されました。共に鈴鹿市市制五〇周年を記念する企画でしたが、いずれも盛会のうちに終ることができました。その一は佐佐木信綱賞短歌大会受賞式。その二は石薬師文庫再開館披露と、それに伴う地元石薬師を挙げたの楽市楽座の賑わいでした。

前者は応募総数三二四四首、日本全国四七都道府県はもとより、ドイツ・タンザニア・アメリカ・台湾等海外からも力作が寄せられ、改めて信綱先生の歌徳を偲ばせました。特に文化会館げやきホールにおける選者馬場あき子・俵万智両先生の記念講演は極めて好評で示唆に富み、熱心な聴衆を魅了いたしました。遠くご留学中のオランダにあって終始ご指導をいただきました選者佐佐木幸綱先生と共に、心から感謝を捧げずにはられません。

後者は例年顕彰歌会をこの日に催してきた信綱先生のふるさと石薬師の人たちが、見事に新しく再生させた石薬師文庫の披露式典の挙行と、それを祝う石薬師全町を挙げての大イベント、宿駅の昔を今に偲ぶ露店大市であります。昭和七年一〇月二三日、信綱先生がその還暦を記念して故郷の若者に贈られた小図書室は、いま新しく市立図書館と町民有志との善意により、読書と思索と親睦との場としてよみがえったのであります。

浄福寺の慰霊法要が終ってから衣斐市長らのテープカットに始まるこの日の資料館周辺の活気にあふれた情景は、かつての東海道四四次の宿場町の賑わいを思い起こさせるものであります。

●平成五年一月九日、信綱先生の高弟安藤寛氏が神奈川県藤沢市鶴沼の自宅で百一歳の天寿を全うされました。謹んで深い哀悼の誠と多年のご指導への感謝とを捧げます。氏につきましては、現在、資料館の公開歌集のなかで、信綱先生の次にその歌集を『百歳現役安藤寛』という小コーナーにして陳列してあります。

信綱先生の敗戦後から昭和三八年九二歳の逝去まで、文字通り自分を減して援助に徹した誠実無比の人でありました。教育委員会編『佐佐木信綱先生とふるさと鈴鹿』の年譜のなかにも、この方のお名前は六回登場してまいります。その中でも鈴鹿市として忘れられないのは、昭和四五年一月二日、市内和泉町にあった藤田佑太郎氏所有の生家を現在の旧地に移築し、佐佐木信綱記念館として公開した時の市長、杉本龍造氏・竹相会主宰佐佐木由幾先生・そして安藤寛氏とのトリオが協力し合った情熱と実践力でありました。総工費一三〇〇万円の大部分は寄附によりましたが、その募金活動の中心にあって国の内外を問わず全信綱門を動員し得たのは、実にこの方の人徳によったのであります。(鈴鹿市教育委員会 中森成行)

# 佐佐木信綱資料館だより

— 第四号 —

目次	佐佐木家の編帳 展示室だより(鳥本のこと) 信綱一首(四) 資料館だより (信綱賞短歌大会・石薬師文庫・故安藤寛氏のこと)
馬場 あき子	社 正 村田 邦夫 中森 成行
	・鈴鹿市教育委員会文化財保護課 (TEL・〇五九三・八二・一〇〇代) 〒五一一 鈴鹿市神戸一八一―八 ・佐佐木信綱資料館 (TEL・〇五九三・七四・三二四〇) 〒五一一 鈴鹿市石薬師町一七〇七

## 佐佐木家の編帳

馬場 あき子

もう少し若かった頃、織り布が好きになって、地方へ出た時はその土地の織り布を見るのが例になっていたことがある。そのころ農村の旧家などに「編帳」という家伝の織り見本が残っているのを感じをもって見る事があった。

「編帳」は、その家の女たちが手から手へ伝えついできたものだ。家の男や女がずっと代々にわたって着てきた、きものの編見本である。

中には嫁いできた織り自慢の嫁が、愛する夫に似合う織を工夫し、または、可愛い孫のために発案した編などもあって、それらが一点一点と累加しながら姑から嫁へ、親から娘へという経路を経ながら、家伝の「編帳」になっていくのである。家の女たちの感情をこめた染色とともにもその編は静かに和綴の手造りの帳の中に貼られ眠っていた。

どれも一見安らかに見えるその古びた精柄の中には、あるいは、時に激しい女の情熱や、悲しい忍耐や、喜びもまじっていることだろう。「編帳」をみてみるとその底から、

昔の「家」を構成していた女手のドラマが浮かび上がってくるような気がしてくる。

ある日、私は佐佐木信綱記念館を見学していて、資料ケースの中に、こうした編帳の一冊を見出して思わず声をあげた。あの学問と歌の家佐佐木家の人々が身につけていたきものの編が今に残っていて、その人々の面影をしのばせてくれる貴重な資料ではないか。手にとって繰るほどに、そこにはまさに、佐佐木家を支えた女たちが、手織のわざに心意気をみせた熱い思いが、しだいに言葉をなして語りかけてきそうな雰囲気がある。



この編帳はいつごろのものだろう。布の中には、かなり新しいものもまじっていて、必ずしも編ばかりではなくなっているのが、かえって、佐佐木家の女たちの心の片はしをのぞかせているようだ。折あって、家族が着たきものの端切れを、記念として丁寧に貼っておいたものかと思われるふしもある。工夫をつくって編を織っていた時代から、染め布を買って着せる時代に移っ

でも、女たちはなお、家のものが着るきものには執着と責任を感じていたのかもしれない。

信綱記念館は、石薬師の旧宅を保存したものだそうだが、その居間の衣桁には、信綱生前の、写真でなじみ深い紋服がかけられていた。あの縞帳の中の、女たちの手織の日常着がかけられることはないだろうか。そんな、ふだん着の信綱の写真が、たしかに記念館の絵はがきの中にあつたような気がする。日頃愛用の文具・調度も、この縞のきものにびったりのやさしさだ。一冊の縞帳が語る女の生活史の深みからは、まだまだ、さまざまな声がかきこえてきそうだが、その声や、物語を聞き取る耳は私にはまだ不十分のようだ。

おそらく、これから信綱研究が細部にわたってされるようになってきた時、佐佐木家の女たちは、この縞帳の中から、より切々と語りかけるようになるであろう。(歌人)

—文中、「ある日、私は佐佐木信綱記念館を…」とあるは、信綱賞短歌大会の選者として来館された折のこと。—

展示室だより 馬場あき子先生のご寄稿に因み、展示室に陳列してあるいわゆる「縞帳」について書いておこう。

和綴本で縦二十三枚、横十五・五枚、習字をした黄半紙を裏返したものに約三七〇枚ほどの縞織物の端切れが貼りつけられている。表紙には弘綱の手で『那木園島本』とある。鳥は単なる宛字ではなく、「中世末期から近世後期に

南方諸島から渡来した布に筋文様が多かったことからの呼称」で(大辞林)、「二種類以上の色糸を用いて縦横に筋を織り出した織物を島物という」(古語大辞典)とある。表紙裏右下に、佐々木、次いで、す満(ま)・けい・み都(つ)と三人の女性名が同じく弘綱の手で書かれている。三人の関係を図によって示しておく。



弘綱は、安政元年(一八五四)二七歳で須磨子と結婚し翌年景子が誕生、その天才的な資質に大きい期待をかけたが八歳で夭折し、明治三年(一八七〇)四三歳で須磨子にも先立たれた。後継者を切実に望んだ弘綱は、その年の二月に二一歳の後妻光子を迎え、信綱・昌綱を得た。

従って『那木園島本』の成立は、明治三年以後であり、おそらく松阪移住の明治一〇年(一八七七)五〇歳前のこと。すなわち舞台は宿場石薬師時代で、現記念館となっている信綱生家の屋根の下で、街道筋の女たちと同じように二人の妻と幼ない娘とが機を織っていた頃であろうかと推察される。このことから、信綱は当然、景子を知らない。それゆえに、余計この腹ちがいの才女の姉を慕った。

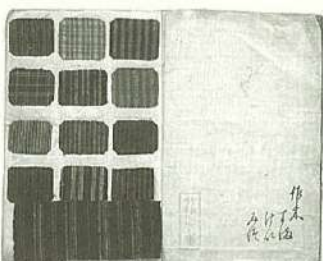
●姉君のみ墓邊きよめたむけまつる色こき花のきちかう  
(桔梗)の花 — 蕪 —

なお、亡き母、光子のことを次のように歌った。

- (一)短き糸もすてたまはず つなぎたくはへ機糸(はたいと)としましき あらひながしの米(よね)のつづも 残したくはへ ほしひとしましき
- (二)我が父君のわざを助け 家のうちをば つつましくをさめて わがはらからを そだてましき あはれ

亡き母 亡き母の恋しき  
信綱の西山雑記によると

(『心の花』昭和三五年二月号、信綱は八九歳。) (一)は石薬師時代、(二)は東京小川町時代の母の面影を描いたもの。すなわち、弘綱の助手を勤めた新婚当時から胃癌の夫の長い看病、信綱昌綱兄弟の養育、特に昌綱は病弱



信綱一首・4

吾妹子が織りし衣わが樵りし  
柴炉辺の許は寒くしもあらず

(文化財保護課 辻 正)

明治三六年一〇月刊、処女歌集『思草』より。吾妹子(ワギモコ)・衣(キヌ)・樵(ユ)りし・柴(シバ)・炉辺(カロリ)・許(モト)寒くしも(し)も、共に強め)。もちろん三〇代以前の題詠的想像の作であろうが、この号の島本物語に寄せて、信綱が幼少の折に聴いた鈴鹿おろしの激しさを偲んでみた。(村田邦夫)

で、ために母自身も著しく健康を害するに至った。そして信綱はその手記を『まことにいたはしく、かつ尊い母の一生であった。世を去ったのは明治二十七年九月十日、齢四五であった。(原文旧仮名)』と結び、弘綱の一年祭に捧げた光子の和歌を掲げている。

●こぞの春はともに花見しこの岡にまた祭するけふのかなしき(『この園』とは、東京上野、桜雲台)

馬場先生は「この縞帳のなから、佐佐木家の妻たちのいな、ある時代の女たちの声を聞く思いがする」と語られて筆を執ってくださいました。

平成三年のこと、ごく親しい人たちと、ひっそり資料館を訪れた『心の花』主宰佐佐木由幾先生が、この島本を手にして、そっと涙をおさえられたことを私は思い出す。

なお、この『那木園島本』は、信綱先生高弟の林大先生が整理され、佐々木ひさ夫人が寄贈された『凌寒荘残簡』中に混在していたもので、その中から発見された。